平成十六年度読書感想文コンクール作品集

もさく

大分工業高等専門学校
学生図書委員会
教官図書委員会

目　次

講評・その他　一般科目　国語科教員　山田　繁伸　2

入選　第一位　『この世で一番の奇跡』を読んで　制御情報工学科　一年　足立　美樹　3

入選　第二位　『きみを守るためにぼくは夢を見る』を読んで　土木工学科　三年　河野　綾子　4

入選　第三位　『片目のオオカミ』を読んで　土木工学科　二年　髙野　健人　5

佳　作　『罪と罰』を読んで　都市システム工学科　一年　下川　奈穂　6

〃　『うつくしい子ども』を読んで　機械工学科　二年　上尾　侑也　7

〃　『スターガール』を読んで　電気電子工学科　二年　濵田　輔　8

〃　『チーズはどこへ消えた?』を読んで　土木工学科　二年　植山　隆義　9

〃　『アルケミスト』を読んで　機械工学科　三年　佐藤　博之　10

〃　『キリスト』を読んで　電気電子工学科　三年　浦竹勇希寛　12

〃　「幸せ」―『フォレスト・ガンプ』を読んで　土木工学科　三年　岡﨑由起子　13

編集後記　学生図書委員長（制御情報工学科　五年）　若林　諒

校内読書感想文コンクール（平成十六年度）

講評・その他

一般科目　国語科教員
山田　繁伸

入選作品は、次のような過程を経て決定された。国語科の夏休み課題の一つとして、一年から三年まで読書感想文の課題が課される。国語科教員二名が授業担当クラスから、各クラス二編を選び、図書館へ持って行く。六クラスずつ担当しているので、一二編ずつの計二四編が集まる。次に教員図書委員五名と学生図書委員五名が、ＡＢＣの三段階評価で審査する。そして、最終的な審査を経て入選一〇作品が決定される。

問題は、いくつかある。各クラスから二編を選ぶ段階で、私は毎回選出に迷う。つまり、二編に選ばなかった作品の中に優れた作品があったのではないかと、つい後ろを振り返ってしまうのである。同じ本についての感想文であれば、かなり客観的によしあしを判定できると思う。しかし、違う本、ましてやジャンルの違った本の場合は、評価の基準も一律にいかない。自分が選んだ作品が図書委員の方々の推薦を頂けなかった場合、私の落ち込みは大きい。一次審査も複数の目を通す必要があるのかも知れない。

図書委員の審査段階では、教員には推されているが、学生図書委員には推されていない作品がある。勿論、逆の場合の作品もある。ＡＢＣの三段階評価より一点から一〇点までの一〇段階の厳密な評価に改めた方がよいのかも知れない。ちなみに私がかかわっている大分県立図書館主催の「先覚者に学ぶ読書感想文コンクール」では、各審査委員が五〇点から一〇〇点までの間で評価点をつけている。

また、今回は自主応募としての作品がなかった。自主応募作品とは、国語科の課題とは別に学生各自が自由に応募する作品である。自主応募の場合は、直接図書委員段階の審査に付される。自主応募は高学年に期待していたが、一作品も出なかったのは残念である。

いずれにしても、いくつかの問題点や改善点がありそうであるが、今回は発表のとおり一〇の入選作が決定された。入選作について、寸評を試みたい。

第一位「この世で一番の奇跡」。この作品が一位に推されたのは、素直に感想を書いているためであろう。前半は物質的に恵まれた社会での人間の不幸を指摘し、後半はその解決策としての正しい選択の必要性を訴えている。しかし、数学の例は足立さんの書いているようにそう簡単にいくものであろうか。数学に苦しんでいる学生に聞いてみたいところである。疑問点の提示で終わっているところが多いが、一年生らしい素直な感想となっている。何のために努力しているのか、何が幸福なのか、何が正しいのかなどの疑問は、簡単に答えの見つかるものではなかろう。しかし、「生きていくうちにきっと何なのかわかってくるだろう」では、少し説得力に欠けるのではないだろうか。

第二位「きみを守るためにぼくは夢をみる」。河野さんは、感想文の最後に「自分一人でどうしようもない、人とのかかわりをもつこと、そのことがすごく辛い悲しみにもなるけれど、それをも超えられるような喜びもあたえてくれる」とまとめている。主人公大江朔をめぐる人々との関係の中に読み取った河野さんの真実である。本当の愛などとは言っていないが、そう言ったものかも知れない。七年の歳月の設定には何も言及していないが、作者の意図がありそうである。

第三位「片目のオオカミ」。面倒なことや辛いことから逃げて後で悔やむ自分を、青いオオカミやアフリカと比べている。青いオオカミは、自分が犠牲になって妹を助ける。アフリカは裏切られても人間を信じ続ける。本の内容を自分の生活に照らし合わせて感想を書いているのを特色とする。読書感想文には、大きく二つのタイプがある。あくまで客観的に本の内容を批評するものと、自分に出来るだけ引き付けて記述していくものとである。高野君の作品は後者のタイプである。

佳作七作品も甲乙つけがたい優れた作品であったと思う。それぞれ個性的な切り口を見せてくれている。

入選第一位

『この世で一番の奇跡』を読んで

制御情報工学科　一年
足立美樹

「奇跡（miracle）。常識では考えられない神秘的な出来事、既知の自然法則を超越した不思議な現象で、宗教的真理の徴（しるし）と見なされるもの」、と辞書には書いてありますが、あなたは奇跡を信じますか？

この本にはオグ・マンディーノとサイモン・ポッターという二人の登場人物が出てきます。サイモンは、

「ほとんどの人間は、程度の差はありますが、すでに死んでしまっています。なんらかの形で、彼らは自分の夢や希望、よりよき人生をおくりたいという欲求を失ってしまっているのです。自分を愛そうとすることをやめてしまい、自分の偉大な可能性をあきらめてしまっている。そして、日夜、絶望と涙にかきくれる平凡な生活に甘んじているのです。彼らは選択の権利を葬りさった、墓場に閉じ込められた生きた屍（しかばね）にほかなりません。」

という言葉を残しています。屍とは、死人のからだ、なきがら、という意味です。自分を見失っている。そんな人々のことをサイモンは厳しくそう呼んでいます。多くの現代人が、物質的には恵まれた社会に生きていながら、自分自身を見失い、むなしさを感じている。そして、何のために生きていくのかわからなくなり、一年間に三万人もの人たちが自殺していく。何のために努力しているのだろう？何のためにがんばっているのだろう？何のために……？幸せになるために？ふと幸せってなんだろう？という考えが浮かんできました。

この世界はお金で動いています。お金さえあれば幸せだろうか？「お金が全てではない」という人もいるかもしれませんが、

「五人の腹をすかした家族に食べさせてあげなければならないのに、仕事がなく、冷蔵庫にもなにもない人間の顔にどうやったら笑みを浮かばせることができるのでしょうか？貧しい生活を宿命づけられているとわかっている主婦に何を告げるのでしょうか？」

三万人もの人たちのなかにはこのような問題を抱え、そして自殺に追い込まれていった人も少なからずいることでしょう。この問いについてどう答えますか？ここにかかげた問題はやさしいものではありません。この本のなかにもこのような話題がでています。でも、サイモンは、

「すべての人が燃える種火をもっている。」

と、そして、

「その種火は絶対に消えはしない。生命がある限り希望もある。」

といっています。でも、そんなことではなにも解決しない、現実はそんなに甘くないと私は考えました。

いくら努力したって、目が見えない人の目が見えるようにはならないのです。しかし、努力をして点字を読むことは出来るようになるのです。この世には出来ないことはいっぱいありますが、それに近づくことは出来るということです。それをする前から無理だと諦（あきら）めてしまえばできません。数学がいい例です。一度難しいと思ってしまったら、その問題やその範囲は一気にわからなくなります。逆に簡単だと思ってしまえば、すらすら解けるようになります。人間は単純です。その単純さゆえに、悪にも善にも簡単に染まっていきます。あやまった情報をコンピュータに入力すれば、あやまった回答がでてくる。それと同じです。否定的な素材を入力すれば、否定的なものを刈り取ることになるのです。いっぽう美しくて正しい肯定的な考えや思想を入力したり、植えたりすれば、肯定的なものを収穫するようになる。だから、『正しい選択』という言葉が大切になってくるのです。今の私には正しいものが何なのかがまだよくわかりません。何が正しくて、何が悪いのか。生きていくうちにきっと何なのかがわかってくるだろうと思います。

今私はこの本に出合えたことを大切に思います。そして、大人になってからもう一度読

んでみたいと思っています。この本をこの世の自分自身を見失っているすべての人に読んでもらいたいです。そして自分とは何なのかをもう一度考え直してもらいたいです。

入選第二位

『きみを守るためにぼくは夢をみる』を読んで

土木工学科　三年
河野綾子

『きみを守るためにぼくは夢をみる』。この本の題名であるとともに、すごく深い言葉である。私は、最初この意味がまるでわからなかった。なぜ守るために夢をみるのか……そんなことを考えながらこの本を読み始めた。

大江朔、彼がこの本の主人公である。朔は寝起きがよく、弟（公彦）思いの優しい兄。そして、サッカーが得意という普通の男の子である。そんな朔が、十歳になるその日の朝、目ざまし時計が鳴っているのはわかるのだが、「もっとねむっていようよ。」と頭の奥でささやく声が聞こえ、目をあけようとしてもあけられずにいた。

「ずっとねむっていよう、海の底まで……。」そんな中、母の声が聞こえ目をあけることができたのだ。

私は、客観的に朔の寿命が終わりに近いのだろうか？などと考えていた。

そう、この日は朔にとって、とても大事な日なのだ。誕生日、それもあるのだが、今日は朔にとっての初めてのデートであった。彼女の名前は川原砂緒。朔とはクラスメイトである。そんなデートの帰りがけ、彼女と朔は公園のベンチに座って、いろんな話をした。砂緒は朔に「大人になることがこわい。」と言った。「大人になったら、うまくやっていく自信がない」と……。

私は、大人になりたくないという彼女の気持ちが、わからなかった。私が小学生だった時は、早く大人になりたかったような気がする。私の大人のイメージは、二十歳になるということと、自分で生活ができるまでになるということだった。ただ今、十八歳なのだが大人になるには、まだほど遠いと思う。砂緒が言っていた、うまくやっていく自信がないという言葉には同感できる。今でも、うまくなんてやっていけないのに、これから先、うまくなんていくはずがないと私は思っている。

「うまくやっていく。」という言葉が、すごく重たい言葉だと思い知らされた文であった。

そんな時、朔が「ぼくは砂緒ちゃんを守れる大人になりたい。ぼくはそんな夢をみるんだ。」と言った。砂緒はうれしそうに笑い、それからまた、たわいもない話をし、彼女を見送った。

朔の思いつきなのかどうなのかは知らないが、この言葉が出てくる朔がすごいと思った。『きみを守るためにぼくは夢をみる』という題名には、大人になることへの希望の言葉だったのだと感じた。

その時、また頭の奥から「五分でも十分でもいいからねむろうよ。」とささやきかけられ、疲れとだるさで朔は目を閉じた。その瞬間、闇の奥に深くしずみこむような眠りについたのだった。

目がさめて、十歳の誕生日の準備をしている家へと帰ると、そこには十五歳になった公彦と母がいた。朔が少し眠っていた間に七年もの年月が過ぎていたのだ。しかし、七年の年が過ぎているのに朔は十歳のまま……。どう考えても、ありえない話である。公彦は、朔を兄とはみとめなかった。しかし、歯の位置が一緒だったことなどから、みとめざるをえなかった。朔ということが判明した後には、近所の人が朔を見る目は違った。自分を自分と見てくれないくやしさ、そして、十七歳になった砂緒、十五歳になった公彦が朔自身にとって、すごく大きな壁となった。

自分が守りたいといった彼女が自分を守ってくれている。いつも、自分の後についてきていた弟が、自分よりも強く、又大きくなっていたら、私は自分の生きている意味がわからなくなるかもしれない。少し眠っている間にすぎた七年間に、意味もなくやつあたりし、その少しの眠りについた自分をせめるだろう。

そんな中、朔を救ってくれたのは、砂緒、

弟の公彦、母と小児科医の三木・元幸・エリクソン先生であった。中でも砂緒は、七年間朔を思いつづけ、朔の傷ついた心に、またいっそう傷ついていた。その傷ついた砂緒に気づいた朔は、あの日言った言葉……約束を思い出した。

『きみを守るためにぼくは夢をみる』。この言葉は、最終的に朔自身にとって大きな言葉であったのではないかと思った。この題名には、自分一人ではどうしょうもない、人とのかかわりをもつこと、そのことがすごく辛い悲しみにもなるけれど、それをも超えられるような喜びをあたえてくれるという事を伝えたかったのではないかと思った。君のためにそれが自分のためとなる。この題名はその場面場面によっていろんな見方が出来る深い題・言葉・一文であるのだと感じた。

入選第三位

『片目のオオカミ』を読んで

土木工学科　二年
髙野　健人

毎週水曜日は実習レポートの提出日である。しかし、自分は毎週のごとく提出時間ギリギリまでレポートを作成している。自分がこの『片目のオオカミ』を読み終えたとき最初に思い浮かんだのが、どんな嫌なことでもそこから逃げ出せば結局は自分に返ってくるということであった。

主人公・青いオオカミは動物園の檻の外で自分のことをじっと見つめる不思議な少年・アフリカに出会ったことをきっかけに、彼に自分の故郷や兄弟、生い立ちについての話をする。青いオオカミにはスパンコールという名の妹がいた。ある夜スパンコールは人間たちに捕まってしまうのであるが、スパンコールは青いオオカミによって助けられるのである。しかし、青いオオカミが人間たちに捕まり、動物園に売られて来たのであった。

本の内容は動物と話すなどの非現実的なことが含まれていて、リアリティーに欠けているかもしれないが、自分の日ごろの行いを見つめ直すにはよい本であるように思われた。

強い母親に見守られ幸せに暮らしていた青いオオカミたちは、ある日突然スパンコールが人間に捕まるという不幸に見舞われ、大きく運命を狂わせてしまうことになる。青いオオカミはそのままスパンコールのことを見捨ててしまえば、今までのように平和に暮らせたのに青いオオカミはスパンコールを助けるために人間に捕まってしまうのである。最初読んだとき、なぜ青いオオカミがスパンコールを助けるためにわざと人間に捕まったのかその理由がよく分からなかった。しかしよく考えてみるとこのことは自分が常日頃感じていることと同じだと思えてきた。

昔、自分の友達が陰口を言われていることがあった。そのとき、自分はその人を守ることも陰口を言う人に注意することも出来なかった。下手なことを言うと面倒なことになるのが分かっていたので、自分を守るために友達を見捨てて、黙ってその陰口を聞いていただけだった。しかし、そのときはよかったが、後で一人になって考えると、あのとき何故友達を守ることが出来なかったのかという後悔で頭の中はいっぱいになった。実習ノートの話も同じであるが、自分は面倒なことからすぐに逃げようとするので、いつも後悔することになる。誰かを守りたいという気持ちは青いオオカミといっしょである。しかし、その気持ちを行動に移すことが出来ず、結局後から悔むことになると言うのが自分と青いオオカミとの根本的な違いである。けれども、青いオオカミが感じた自分を犠牲にしてでもスパンコールを助けたいという気持ちは、自分たちが日常生活の中で時折感じていることと同じなのではないかと思う。

アフリカは、小さい頃からいろいろな人に育てられ、捨てられそれを繰り返し、いろいろな人や動物たちとかかわってきた。アフリカは人間に裏切られても人間を信じることをやめず、やさしい気持ちを忘れなかった。青いオオカミの母親である黒い炎と同じで、アフリカは現実から逃げることをしなかった。何故そんなに人を信じられるのか、どんなに裏切られてもやさしい気持ちを忘れないのか

その理由が自分には分からなかった。
　その動物園にはアフリカが昔かかわってきた人間や動物たちがみんないた。その中には会いたくない人や会いたかった動物たちもみんないるのである。アフリカがどんな気持ちだったのか直接本の中には書かれていなかったが、きっとアフリカは自分を捨てた人間を恨んでいないと思う。アフリカは目の前の現実をすべて受け入れ、それを避けたりせずに立ち向かっていける人だからだと思った。
　自分たちは普段、辛いことや面倒なことに出会うと、ついそれからどうやって逃げようか考えてしまいがちだ。そしてそれが過ぎてしまえば何事もなかったような顔をしてしまうのである。けれども出会ってしまったことは立ち向かおうが逃げようが、結局自分のところへ戻ってくるのである。いつか自分のところに戻ってきたときに、それから逃げていたとしたらきっと嫌な気分になるであろう。（だからといって実行しているとは限らないが……。）
　片目のオオカミは、自分にとって大事なことを教えてくれた。きついことや面倒なことから逃げていては何も出来ないということ、そして、現実で起こっていることから目を背けないということだ。やさしい気持ちを忘れるなとアフリカと青いオオカミは教えてくれた。明日明日と先延ばしにせず、今出来ることは今やらないといけないとこの物語を読んで私は思い始めた。

佳作

『罪と罰』を読んで

都市システム工学科　一年
下川　奈穂

　主人公のラスコーリニコフという青年が「ふつうの人間」とか「ふつうでない人間」とか、みょうなことばをつかっているが、これは常識をもったふつうの社会人、常識をのりこえて生きようとする、特殊の世界人、あるいは、簡単に、凡人と超人との対立といったふうに考えてもいいと思った。
　どういうふうに育ったら、ラスコーリニコフのような考えをもつ人間ができあがるのか不思議に思った。
　また、理想と現実の食いちがい、知性と本能とのあらそい、そうした問題も、この小説からよみとることができるが、結局すべては人間存在の弱さということから発する問題だと思う。そうした弱さのために、超人の思想の夢もはかなくやぶれて、とても恐ろしい罪の意識と、現実のきびしさとにもてあそばれ、ラスコーリニコフは苦しみ、悩んでいた。
　とはいえ、救われることの幸福はそうたやすく得られるものではない。その救済と復活の日までには、すでにラスコーリニコフは、いやというほど精神的な刑罰をうけている。その苦痛の激しさは、彼に殺されたときの、金貸しばあさんの苦痛の、千倍にも値すると思った。本当は殺された人間や残された家族たちが被害者で一番かわいそうだけど、ラスコーリニコフもとてもかわいそうな人だと思った。
　すごく性格が悪くて、もう長く生きられなさそうな人がいるとして、その人は大金をもっており、そのお金はその人が短い時間を充実して生きるためだけにあるとする。もう一人とても貧乏な大学生がいるとする。ある意味老人と大学生とだったら、将来役に立つのは大学生で、老人よりも大学生に学費などでお金が使われた方が有効な使い方のような気がするけど、ラスコーリニコフの考えたことはやはりまちがっている。ものは古くなったら買いかえるけど、人間は一人ひとり意志や感情を持っている生きものである。だから、「こいつは年をとって先がないから捨てて、若い方をとろう」とかいう考え方はおかしいと思った。その人の人生はその人のもので、他の誰も手を加えてはいけないと思った。
　でも、今私はラスコーリニコフのやったことは、人殺しは何をまちがえても絶対にしてはいけないことというのがわかっているが、もし自分が彼のような立場にたたされたら、ラスコーリニコフと同じ行動を絶対にしないとは言えないと思った。結局みんな自分が一番大切で、いざとなったら自分が助かるためには、他人はどうなってもいいと思ってしま

うのが人間だと思った。だから、殺人はこの世から消えることはこれからもありえないと思った。

ドストエフスキーが、この「罪と罰」という小説で、書きあらわそうとしたことがらはやはり、人間のおちいりやすい悪への誘惑、そして、当然のむくいとして受けなければならない罪意識の苦しみだと思う。

ラスコーリニコフのそばに、ソーニャのような人がいてくれてよかったなあと思った。ソーニャは、キリスト教精神のあらわれのような人間で、酒場の女という職業にもかかわらず、生まれたままのような無垢の魂をもっている人だ。そんな人がそばにいてくれたから、ラスコーリニコフは生きる希望を持つことができたんだと思った。

ドストエフスキーのかいたこの話は、テーマの深刻さ、構成の複雑さ、そして表現のなまなましさなどの点で、私が今までに読んだことのある本の中でも異色のものであり、魂をゆさぶるような、強い感銘を与えられた。この本以外の他の作品も読んでみたいと思った。

人を殺したら、冷静になったときに必ず後悔すると思った。人の命を自分が奪った重みと恐ろしさにたえられないだろうなあと思った。

佳作

『うつくしい子ども』を読んで

機械工学科　二年
上尾　侑也

『うつくしい子ども』というタイトルのこの本は、一九九七年に神戸で起きた、酒鬼薔薇事件を思い出させるような内容の本でした。

酒鬼薔薇事件とは、神戸に住む十四才の中学三年生の少年が児童数人に対して殺人や傷害を起こした事件です。世の中に大きな衝撃をあたえ、少年法の改正問題にまでなりました。

その頃自分は十才、小学校四年生でした。周りの人達の話題は、その事ばかりになり、十四才の少年が、どうしてそんな事件を起こしてしまったのかと、テレビでもたくさんの評論家が討論をしていました。その波紋は、我家にも及んできました。簡単に人を殺してリセットすればまた生きかえる、テレビゲームが良くない！という事で、ゲームをする時間を減らされました。

七年経った今は、この『うつくしい子ども』と言う本を読むまで、事件のことはすっかり忘れていました。自分の身近の誰かに聞いてみても、やはり忘れかけていました。世の中なんて、そんなものなのかもしれないなと思います。直接自分に関係のない出来事は、その時は、自分達の身に置きかえて大さわぎしても、時間が経てば薄れて忘れてしまいます。

この本は、罪を犯した少年の事を書いたものではなく、その少年の家族の事を書いた本です。

主人公ミキオの弟カズシが、妹の同級生の女の子を殺すという罪を犯してしまいます。そしてその事で、家族が世間の多くの人々から冷たい目で見られ、苦しみや悩み、あるいは、混乱や不安の中に追い込まれます。しかし、ミキオは積極的に行動し、いろんな事から逃げずに、一歩一歩前に進んでいく話でした。

ミキオのすごいなと私が思ったところは、次のことです。弟が殺人を犯したことで、親は「迷惑をかけるから」と言う理由で、会社を辞めようとします。離婚も考えました。ミキオも今の学校を離れ、新しい名前にして、また初めからスタートしようと思ったりもしました。でも「どこに行っても変わらない。だったら、今の名前で今の学校へ戻る、もう逃げてもしょうがないよ。あの人達は、どこに行っても追ってくる。それにカズシが僕の弟であることは、変わりないんだから。」と家族を説得しました。自分だったら、その時の事しか考えなくて、どこかに逃げれば何とかなると思い、転校したり名前を変えたりすると思います。ミキオは冷静に物事を判断し、

自分だけではなく家族の事も考えていました。彼は中学二年生で自分より三つも歳下なのに、自分で意見を考え、それを言えることはすごい事だと思います。

もう一つは、弟がなぜ殺人を犯してしまったのかを真剣に考えたことです。「なぜ弟があんなことをやったのか、その理由を探そう。追いこまれたにしろ、自分から突きすすんだにしろ、あの状況にカズシをむかわせる何かがあったはずだ。人を殺すことは簡単には理解できないだろう。ぼくだってそれくらいわかっている。一生かけたって無理かもしれない。でも理解しようという気持ちをなくしたらだめだと思った。カズシはこれからもずっとぼくの弟なんだから、時間をかけたってかまわない。すくなくとも自分で納得できるまで、カズシの気持ちや心の動きを調べてみよう。それは、最悪のおこないでも、誰かがわかってやる必要があるのでないか。そうでなければ、犯罪をおかした人は一生ひとりぼっちになってしまう。最低の人間だって誰かがそばに寄り添ってあげてもいいはずだ。それが自分の弟ならなおさらじゃないか。」

自分にも二人の弟がいます。その弟が、何か悪い事をした時に、弟の事を理解してあげて側についていてあげるという事が出来るだろうか。世の中の人たちからの視線や言葉などに耐えて生きていく事が出来るだろうか。全てを弟のせいにして、弟の苦しみを共有できるだろうか。たぶん自分は出来ないだろう。

この本に出会えた事で、自分の考えが、少しだけれど変わりました。『悪い事をした人は悪い』と決めつけていた考えが、悪い事をしなければいけない理由は何なんだろう、とかその人は、どういう気持ちだったんだろう、とか少し違った角度で物事を見られるようになりました。すると、何となく考えが前向きになってきた気がします。

世の中には、どうしようもないくらい、許せない出来事や犯罪があります。そしてそれが、いつ自分に降りかかるかわかりません。でももし、そうなった時は、ミキオの『人を許せる気持ち』を思い出して、乗り切って行こうと思います。

佳作

『スターガール』を読んで

電気電子工学科　二年
濱田　輔

僕は精神的に強くない。冗談でも少しからかわれると、必ずしばらくは落ち込んでしまう。いつも気にしすぎるのだ。実際はそうではないかもしれないのに、勝手に自分一人で深く考えすぎ、無駄な時間を費やしてしまう。自分の性格を少々やっかいな性格だと思っている。

そんな僕と、「ｓｔａｒｇｉｒｌ」の主人公、スーザン・ジュリア・キャラウェイは全く反対の性格、感性の持ち主だった。彼女は登場した瞬間から、なにか光るものがあった。特別に容姿がいいというわけではないが、何も臆することなく、誰にでも気さくに楽しそうに話しかけることが出来て、独特のオーラを持っていた。つまり変わっていた。

スーザンはとても不思議な人間だと思った。この世界が「あたり前だ」と思っている常識は、スーザンにとっては何の価値もないものなのだ。

スーザンは自分の名前を「スターガール」と名乗った。学校生活の中で名前を勝手に変えるなんて常識では考えられない。彼女は自分の意志のままに行動しているのだ。例えば赤の他人の葬儀に勝手に出席して泣いたり、知り合いでもない子どもの誕生日にプレゼントを贈ったりと、理解しがたい行動を取っている。

スーザンは何も怖がらないで、自分のしたいと思ったことを実際にすぐ実行に移してしまう元気で素直な人だ。人の良い所も悪い所も全部受け止めて、全ての人達へ自らの大きな愛をおくった。これは本当にすごい事だと思う。

一方、僕はといえば幼少時代から否定的な人間だった。人がなにか言うたびに「本当にそんな事思っちょんの？絶対違うこと考えちょんやろ、偽善者みたいな事言うなよ」と

か、いつも素直ではないことを考えていたような気がする。別に友人に裏切られたのでトラウマになり、人を信じられなくなったなどということはないのだが、なぜか偏見を持ったまま、今日までできてしまった。

本編の中で、スーザンが「普通って何なの？」という疑問を持つ場面があり、僕はそこでも色々と考えさせられた。

「普通」というのは何だろう。皆と同じような行動をとることだろうか。もちろん、非常識で無作法な態度をとっている人間を「個性的だ」と呼ぶことは間違っていると思う。だから、普通の行動とはこうだと一概に決めつけられない。外に出れば皆同じような服装をしているように僕には見えるし、個性とは何なのかがやはりよくわからない。何事も根本的に考えてみると、納得のできない難しい疑問が新たに生まれてくるものだと思った。スーザンが人の目を気にし、友達をつくろうと「普通」を目指し、自分の爪にマニキュアを塗って派手な服装をして、性格までも偽って全く違う人間を演じてしまっていた。なぜか僕はがっかりしてしまった。

苦労はしていたものの、独特のテンションで生きいきと輝いていた「スターガール」という少女が消えてしまったのだから。

人になんと言われようと自分の信念を貫き通す！自分は自分だ！と言いきって、それを実際にやりとげる事はとても難しいことだと思う。人から服のセンスが変だ、と指摘されれば一応気にして考え直すし、ましてやスーザンの場合、自らを変えなければ人づき合いが上手くいかなくて、無視をされ続けるというところまで追いつめられていた。やはり人目を気にしてしまう動物が人間なのだと思う。きれいごとをいうのは簡単だ。口を開いて強気な発言をすればよいだけの事なのだから。

人間は思っているよりもとてもデリケートな存在だ。人との関わりがなければ生きていけないものだし、常にどんな環境にいる人もさまざまな悩みを持っている。あたりまえのことだが、悩みをかかえていない人間なんていない。それは自然な事。変に思う必要はない。

スーザンは結局以前の、「スターガール」に戻って、学校から消えてしまった。彼女がいるべき場所はあの学校ではなかったのだと思う。自分ではない人格を演じるのは大変だし、無理がある。

人間関係の難しさ、集団の怖さを改めて教えてもらったと同時に、個性に対しての考え方、素直さや純粋さをスーザンは教えてくれた。

「良い本」はたくさんある。その中でもこの本を読んでよかったと思う。自分を見つめ直すことが出来たのだから。

佳作

『チーズはどこへ消えた？』を読んで

土木工学科　二年
植山隆義

人生を変えることはできるだろうか。恐怖を恐れず、前へ前へと進んで行く。途中で振り返らず、自分が求めるものを探していく。

僕は「人生とは一体何だ」と考えることがよくある。何のため学校に行き、何のため勉強するのか。自分の生きがいは何だ。しかし、毎回その答えは見つからず、悩みは複雑になる一方である。そんな人生の行き止まりになった時に読みたいのが、この『チーズはどこへ消えた？』である。

この本は、数年前テレビや雑誌などのメディアで有名になった本で、知らない人はいないだろう。会社などでも、自覚を持たせるため社員全員に読ませたという話も聞いたことがある。

この本は大きく分けて三つの部分からなっている。初めは「ある集まり」の場面で、かつて高校のクラスメートだった人達がクラス会で集まり、それぞれ自分の生活に起きた変化をどのように受けとめているか話している。ほとんどの人が昔思っていたようにはいかず、

思いがけない変化に対応しきれないでいた。そこに、ある物語を聞いて全てが変わったという人物が、その物語を話してくれた。それが二番目の「チーズはどこへ消えた？」で、この本の中心部分である。そして三番目は「ディスカッション」の場面で、クラスメート達がこの物語をどのように受けとめ、自分の仕事や生活にどのように生かすか話し合っている。

この物語『チーズはどこへ消えた？』は、いたって単純な話で、まるで絵本にでも出てきそうなほどである。しかし、その単純さに、物事の変化に対応するヒントが含まれているのである。

物語に登場するのは、ネズミのスニッフとスカリー、小人のヘムとホー。舞台は迷路で、二匹のネズミと二人の小人は毎日この迷路でチーズを探していた。食料にするためと、幸せになるためである。スニッフとスカリーはネズミだから単純な頭脳しかもっていなかったが、すぐれた本能で大好きなチーズを探した。一方、小人のヘムとホーは複雑な頭脳を使って、ネズミよりも高度な方法でチーズを探した。

二匹と二人はそれぞれ自分達のやり方で、ついに好みのチーズを見つけることに成功した。それから毎朝、ネズミと小人はそのチーズの場所に向かう日課ができた。不思議なことに、チーズは毎日同じ場所に置いてあった。しかし、そのチーズは毎日だんだん少なくなっていた。その事に気付いていたのは、ネズミのスニッフとスカリーだけである。二匹はチーズが見つかったからといって、決して気を抜くことはなかった。あたりの匂いをかぎ、走りまわって、何か前日と変わったことがないか調べた。だからこそ、チーズが少なくなっているのも知っていて、チーズが消えた時も驚かなかった。彼らは事態をくわしく分析したりせず、再び新しいチーズを探しに行った。

一方、小人のヘムとホーは、チーズが置いてあるのが当り前であり、そのチーズを自分達のものだと考えるようになった。しかし、彼らはチーズがだんだん少なくなっているのに気付いていなかったため、チーズが消えた時は相当なダメージを受けた。彼らは今までのチーズにしがみついて生活していたため、何としても今までのチーズを見つけ出そうとした。しかし、そのチーズと会うことは二度となかった。やがて、二人は自分達が間違っているのに気付いていき、再び新たなチーズを探しに行くのであった。

この物語で最も見てもらいたいのは、この小人が再びチーズを探しに行く時、自分達の戒めとして壁に書いていった格言である。この格言がとても意味深く、印象に残っている。その格言の中で僕が最も気に入ったのが「もし恐怖がなかったら何をするだろう？」である。恐怖はいつでも必ず襲ってくる。その恐怖がなかったらどれだけうれしいだろうか。しかし、恐怖はなければならないものでは、とも僕は思う。自分へ恐怖があってこそ、それを乗り越えて人間は強くなっていくからである。

この本は、何度も読んで自分について考え、明日からどのように生かすか考えることができる。だからこそ、人生の行き止まりになった時にぜひ読みたい一冊である。

佳作

『アルケミスト』を読んで

機械工学科　三年
佐藤博之

人は挫折する。一生に一度は挫折する。挫折しない人はいない。もしいるとすれば、それは人ではない。魂の入ったただの人形だ。しかし、人は挫折から這い上がる。這い上がろうとする。誰だってドン底の人生を歩もうとは思わない。だから人は、挫折しても這い上がろうと、幸せな人生を歩もうと努力する。

少年は挫折する。夢を叶えるための旅の途中で、この物語の主人公は挫折する。あるときは騙されて、所持金を全て盗られ、また、最後の最後で捜し物が見つからず挫折し、あきらめかける。しかし、少年は努力する。努力して、その挫折から這い上がる。所持金が

無くなっても、働いて働いてお金を貯めたし、捜し物が見つからなくても、ちょっとしたことをヒントにし、あきらめず捜し続けた。

人は選択し、決定し、決断する。一生に一度は、人生を決める大事な何かを選ばなくてはいけない時がくる。選択しない人はいない。もしいるとすれば、それは、決められたレールの上を歩く、自分で思考できない人だ。非情にならなければならないときもあるだろう。勇気のいる時もきっとあるだろう。それでも人は、自分のため、他人のため、選択し、決定し、決断する。

少年は選択しなければいけなかった。一つはそのままの人生。羊飼いとして、貧しく多忙だが充実した日々を送る毎日。自分の仕事に誇りを持ち、何不自由なく過ごす人生。もう一つは、夢を追い、夢に向かう人生、海を渡るため、飼っている羊達を全て売り払い、夢のために歩き出す道。叶うかわからない夢のため、今ある全てのものを捨てる人生。そして少年は自分の進む道を決定し、決断する。夢のために歩くと。夢に向かって歩くため、今ある全てを捨てると。それが少年の出した自らへの問いに対する答えであった。

大抵の人は、十五歳で、人生を決める大事なことを選択しなければならない。私も例外なくそれに当てはまる。それは高校受験。自分の人生を振り返り、今自分がするべきことを見つめ、この先自らが進むべき一つの道を選ぶ。私にとってその道とは、ここ、大分高専であった。自分の進む道はここしか無いと思った。だからここを目指した。だからここに来た。苦労もしたが、これが自分にとって最も適した道だと思った。

しかし、ここで一つの疑問に至る。少年は後悔しなかったのだろうか。自分が選んだ道を後で「あちらにしとけばよかった」などと思わなかったのだろうか。だがきっと、これは私が考えることではないのだ。少年自身が判断することなのだ。そして、私はどうだろうか。自分で選んだ道を後悔していないだろうか。だがこれも、おそらく今考えることではないのだ。後悔した・しないは、死ぬ直前に布団の中で自分の人生を振り返って思うことだろうから。まだ二十にも満たない若造が考えることではないのだ。

人には、大切な人がいる。まずは家族。そして友人。後の伴侶。いずれ生まれるであろう子ども。そして、あなたと一緒の世界に住む全ての人々。全員が全員、どこかであなたに関わるのだ。誰か知らない人でも。どこか遠い所でも。

少年には協力者がいた。前に進む勇気をくれた一国の王。あきらめかけた道を示してくれたクリスタル屋の店主。辛い道を共に歩いてくれた若き錬金術士。そして、夢を叶える場所まで導いてくれた、この世の全ての知識を持っている錬金術士。彼らがいたから、少年はきっと前を向いて歩いていけたのだろう。彼らにとって少年は、すれ違う人々の中の一人かもしれない。しかしきっと少年にとっては、彼らはかけがえのない存在なのだ。そして少年は旅の途中で、生涯最愛の人と出会う。少年は彼女に告白した。「好きです」と。そこには嘘もなく建前もなく虚偽もなかった。それは真実であり真相であり本音だった。

私には大切な人はいるだろうか。私が助ける、私を助けてくれる、大事な人はいるだろうか。一番最初に思い浮かぶのは家族だが、やはりこれも考えてわかることではないのだ。気がつけば隣にいる、大切な人とはそういう人なのだ。

少年は夢を掴む。いつか夢で見た、山のような黄金を手に入れる情景。それが現実となるのだ。そして少年は帰るのだろう。最愛の人が待つ所へ。

私は夢を掴めるだろうか。立派なエンジニアになるという夢を。いや、掴めるかではなく掴むのだ。一歩一歩前進しながら、いつか。

佳作

『キリスト』を読んで

電気電子工学科　三年
浦竹　勇希寛

日頃あまり本を読まない僕は、今年の抱負として、本を読むことにしました。友達に薦められた本から始まり、今日までに多くの本を目にしてきました。が、本当に最後まで目を通したのは、友達が絶賛していたものばかりで、自分から進んで読み始めて実際に熟読したのは、ほんの僅かでした。その中でも、多くはファンタジーものでしたが、何か違う感じの本を読もうと、実際に目を通し、熟読したのが、この「キリスト」の伝記でした。

この本の主人公である「イエス・キリスト」は、今ではキリスト教の始祖であり、その名にある「キリスト」というのは、キリスト教の唯一神エホバの遣わした救世主のことです。

キリスト教の主な教えは、全てのものに対する「愛」を唱えていますが、それに関して驚いたのは、

「自分を憎み、非難する者でも、自分たちと対立する敵をも愛しなさい。もし、相手が自分の右頬をぶったのなら、彼に左頬を向けるがよい。」

と、語ったことです。もし自分を非難する者がいたら、その人の罪を許し、愛すことができるだろうか。もし、右頬をぶたれたら、左頬を向けることができるだろうか。この本を読んで深く考えさせられました。

イエスは母の腹の中に宿った時から「この子はこの世界を救う神の子、救世主だ」と言われていました。

彼の幼少期は、父や母、周りの人々の親切で平和に育っていきました。その頃はまだ世間の美しい所しか知らず、学校で「ノアの箱船」の話を聞いたことから、本当に世界の人々は皆、正直で神さまに認められたノアの子孫であると信じていました。ところが、現実には戦争が幾度となく起こるような恐ろしい世の中であることを知り、そこで初めて人々の幸せについて考え始めました。

「戦争をしても決して人々は幸せになれない。それなのにどうして人々は同じことを繰り返すの。」

そうイエスが言った時、父親は大変驚いたようです。

イエスは幼い頃に、幸せとは何か、愛とは何に対して与えるものか、などを深く考えさせられたそうです。

彼は大きくなるとヨハネという預言者に出会い、そこで大きく人生を変える出来事がありました。イエスはヨハネの洗礼を受けた後、様々な質問を問いかけてくる悪魔に会ったそうです。その悪魔たちは皆「もし本当におまえが神の子ならば……」という問いをかけたが、イエスはその悪魔の囁きに耳を傾けず追い払いました。もうその時からイエスは、

「自分が迷える人々たちに神の道を説いていこう。」

と決心していました。

イエスはその後、世界の各地を回り、ヨハネに替わって神の預言を説きました。

彼はその旅の中で、十二人もの弟子を引き連れました。その中には、時代の中で悪人とされている役人や漁師もいます。どうして彼らがイエスに付いていたのか、それはイエスの説いた「万物全てのものに対する愛。誰もが罪を犯すけれども、全ての罪は神の洗礼によって洗われる」ということに心を変えられたからです。

イエスはなぜそんなことを言えるのか。本当に自分を非難し、殺そうとする人を愛すことができるのか。この本を読む最中で考え続けました。

イエスは十二人の弟子を連れて、今ではキリスト教の聖地とされているエルサレムに行き、「ここで悟りを開く」ということで大きな食事会をしました。それが後に言われる「最後の晩餐」と呼ばれるものです。

この晩餐の後、弟子の一人であるユダが裏切りました。そしてその裏切りによってイエスは捕らえられ、暴力を受けた後に十字架にはりつけられました。そして最後には殺されました。

この時、イエスは謀反を起こしたユダも、自分を捕らえ、死刑にした祭司も、最後の最後で自分を置いて逃げた十一人の弟子たちも、全ての者を許し、神に祈りを捧げました。

どうしてイエスは彼らを許せたのか。読み終えてしばらく考えさせられました。本当にこれでよかったのでしょうか。仮にも自分を最後に裏切った弟子たちに教えを伝えさせて彼は天国で何とも思わないのか。

この本を読んで僕は、他の本とは何か違う感動を覚えました。

今でもどうして彼はあんな人たちにも慈悲を与えたのかが理解できません。

世の中には本当にまだ自分が理解できないようなことが多いです。このような伝記を通じて、今の自分の考え方を改め、理解を増やしていきたいと思います。

佳作

「幸せ」―『フォレスト・ガンプ』を読んで

土木工学科　三年　岡崎　由起子

この本、『フォレスト・ガンプ』は映画化されているが、私はあえて本を取った。最初の文が強く私の心を引き付けたからだ。

「頭の悪い人間はしあわせだ。彼らは目に見えぬよろこびを知っている。」

ドライデンという方が言った言葉だそうだ。頭が悪いってどこまでを頭が悪いと呼ぶのだろうか？目に見えぬよろこびとは何だろう？と私は思った。

フォレストは、知能指数七十以下、人並み以上のめぐまれた体格、そして素朴で純粋な主人公である。

ＩＱ七十といえば、五歳から十歳程度の知能ということになるらしい。南北戦争の英雄であるネイサン・フォレスト将軍にちなんで名付けられたというのに、皮肉にもフォレストは迫害される側だった。いじめっこに追いまわされ、普通学校に通うことを許されず、いくら社会的な成功をおさめても、世間は彼の知能指数ですべてを判断しようとする。

フォレストはむずかしい理屈や理論はわからない。打算や妥協も知らない。その場の状況についてじっくり考えて判断をくだすという事もできない。彼にできるのはわけもなく自分をいじめたりしない人を心から信じて、たとえどんなことがあってもその人に言われた事をやり通すだけ。もちろん、世の中にはフォレストのことを、「人並みではない」からといって、それ以外にはたいしたわけもなしにいじめる人間の方が多い。そんな時、フォレストだって悲しくてやりきれない思いにかられる。けれど、この汚れのない魂の持ち主は、計り知れない優しさで、「人並み」の知能を持ちながらも干からびた心しか持たない人達を許してくれる。理不尽な目に合いながらも決して絶望せず、いきどおることもなく前進して、いつか周りの人達に幸せをもたらしてしまう。そこがフォレストらしいところだ。

フォレストにとって大事なことが三つある。初恋のジェニーの姿を見失わないようにすること。泣き虫の母さんの涙を止めること。それから友達を信じることである。それ以外の場面ではもっぱら「正しい行動をとる」ことにしている。限りなくシンプルで、限りなくマイペース、それがフォレストの生き方なのだ。騒然とした時代の空気のなかで、フォレストの周りでは誰もが熱病に浮かされたように興奮し、傷つき、怒り、苦しみ、悲しみ、そのあげく全てを失っていく。自分よりも「頭がいい」はずの人達がなぜこれほどまでに「ばかばかしい」ことにこだわり、「正気の沙汰ではない」と思えることを平然と行ったりしているのか、彼は何としても合点がいかず、いつも控えめにとまどうばかりである。折りにふれてフォレストがぽつりと洩らす素朴な一言は、どんよりした雲の切れ間にさしこんできた一条の光のように、真っすぐで美しいと思う。

一九五〇年代からのおよそ三十年間にわたる時代は、公民権運動にはじまってベトナム戦争、反戦運動、アポロ計画、ウォーターゲート事件と、アメリカは政治的にも社会的

にも混乱と興奮に満ちた時代だったであろう。その時代にただ一人、「自分はおろかである」ことを知っていた人物、それがフォレスト・ガンプなのかもしれない。

私は、フォレストが言った「おろかなこと」であるベトナム戦争をこの本の中で一番考えさせられた。さっきまで一緒に話していた友人達を見るも無残に殺されてしまう現実、逆に敵を殺さなければならないという事、それに不衛生な環境など、今の日本に生まれた私にとっては全然かけ離れた世界。それが今、イラクなどで起こっていると思うと、本当におろかな事をしていると思う。なぜ、そんなおろかな事をアメリカは何度も繰り返すのか不思議でたまらない。夢を持つ人間は戦争なんかで死ぬべきじゃないのだから。

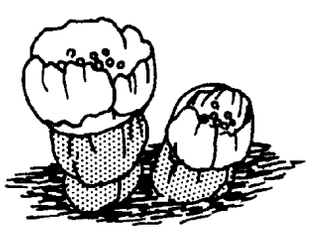
私はこの本を読んで、頭の悪い人間と言えば、知能指数が低い人間の事をさすものだと思っていた。しかし、それは違った。人間は誰もが自分がそして周りが幸せになるために頭を使うべきである。その頭を、戦争で使ったり、犯罪で使ったりするのが頭の悪い人間なのだと思う。だから、この本の最初の一文は間違っている。

「頭の悪い人間は不幸せだ。」

そして、これも付け加えたい。

「彼らは目に見える喜びも目に見えない喜びも知らないのではないか。」と。

私はフォレストのように、人を信じて、どんな事でも許せるような心を持ち、優しく、賢い人でありたいと思う。



編集後記

学生図書委員長
（制御情報工学科　五年）
若林　諒

…「読書」とは、結局のところ、やはり「娯楽」だといえるのです。どうでしょう、先生方。

ええ、カーペンター教授の御反論も尤(もっと)もです。確かに、そのように割り切ってしまうには、確たる証明が必要ですからね。

それでは、御手元の資料を御覧下さい。

「もさく」です。

これは日本の大分高専という学校のものでしてね。「読書感想文」、つまり、物語を読んだ感想を学生たちが書いたものです。その中でも特に優秀とされた作品がこれに掲載されています。

いえいえ、日本の学生は日常的にこういったものを書いているわけではありません。精々、読書記録を付けている程度でしょう。

「もさく」が対象としているのは「夏休みの課題」です。

え、ああ、そうですね先生の御国、アメリカでは、夏休みに課題はありませんからね。もちろん、読書教育に関しては、そちらの方が進んでいますとも。しかし、長期休暇中に日本の学生たちが何を読み、何を思ったか、中々に興味深い資料でしょう。

さて、それではまず、思い切って最後の「編集後記」から見ていきましょう。

これはですね、昨年のものなんですが、この文章を書いているのは学生図書委員長です。結構、立派なことを書いていますね。さすがは委員長といったところでしょうか。今年の委員長はどうも、変なことばかり口走っていますがね。

それにしても、つまりこれは「読書感想文」の「読書感想文」といえなくもないわけで、書くのは実に厄介でしょう。私だったら投げ出しかねませんね。この「編集後記」もかなり資料価値が高いといえるでしょう。

それでは、そろそろ本題の「読書感想文」を読んでいただきましょう。

おお、さすが皆さんは速読ですね。文章ならば一行程度の間しか空きませんでしたよ。

どうです。面白いでしょう。学生たちは感想文の中で様々な表現を用いて、何を思ったか、何を考えたか、を語っていますがね、要は、彼らは読んだ本の「面白さ」を、そこに刻んでいるのですよ。

どうやら、御理解頂けたようですね。「もさく」から、はっきりと伝わってくるでしょう。学生たちが感じた「面白さ」が。

この「面白さ」こそ、「読書」が「娯楽」たる所以なのです。

それでは以上を持ちまして、私からの研究報告を終わらせて頂きます。

「もさく　第三十二号」

発行日　平成十七年一月十一日

発行者　大分市牧一六六六番地
大分工業高等専門学校
学生図書委員会
教官図書委員会

印刷所　三和印刷出版株式会社

住　所　大分市高江西一丁目四三三―二三一

電　話　〇九七―五九六―七七〇〇